P2-010

保育園看護職研修会の研修内容と研修後の実践・意識の変化との関連 －研修の受講者へのアンケート調査より－

相墨 生恵[1,2]、岩渕 光子[2]

[1]東北文化学園大学　医療福祉学部　看護学科、
[2]岩手県立大学

【目的】
研修に参加したことで意識や園内での取組みにどのような変化をもたらしたかを明らかにし，研修内容との関連から，専門職としてスキルを高め，より実践につなげられるような研修のあり方について検討する．

【方法】
平成25年，26年に各2回，Ａ県内の保育園で働く看護職を対象とし研修会を開催したところ，研修への参加者は25年度が延べ85名，26年度が延べ77名であった．年度内に一度でも研修に参加した方に対し，各年度末にそれぞれ55名を対象に調査用紙を郵送した．調査内容は研修後の意識の変化や実践した活動などであり，選択あるいは自由記述で回答を求めた．個人が特定されない形で公表する旨を記載した文書を添付したうえで参加者の投函を持って同意とみなした．

【結果および考察】
回収数（回収率）は2回とも33部（60.0％）であった．研修受講後の自身の思いや行動の変化については，「研修の必要性への思いが高まった」は25年：69.7%，26年：75.8%であり，実際に他の研修などへ参加するようになったのは25年：6.1％，26年：18.2％であった．研修後に「研修資料を復習した」のが25年：57.6％，26年：72.7％，「専門書等でもさらに学習した」のは25年：36.4％，26年：24.2％であった．「子どもや家族の捉え方について変化した」は25年：39.4％，26年：45.5％で，具体的には「こちらからアプローチするようになった」「悩みを一緒に考えるようになった」など家族の気持ちを理解しようとする行動や「自信が持てて対応が変わった」など自分の看護への自信が行動の変化につながったことが挙げられた．研修内容別のその後の実践については『発達障害』では「理解できたことで対応を変えられた」という意見の一方，「0歳児担当なので」や「保育士が主体なので」など修得した知識をうまく活用できない現状を訴えるものがあった．また『成長発達・育児支援のポイント』でも「自分の意見を押し付けすぎないようになった」などの意見の一方，「親と関わるのは保育士なので」など職場でのポジションや他職種との連携に困難を感じているものもあった．しかし『アレルギー』では組織や仕組みの改革から個別への対応まで様々な実践が多くあり，看護職として命に直結する内容については専門性を感じやすく即実践につなげることができていたと考えられた．このことからテーマによっては活動へのつなげ方を具体的に示唆，共有することも必要と考えられた．

P2-011

病児および病後児保育施設における子どもとその親へのかかわり：看護職・保育職が気をつけていることを中心に

西田 志穂[1]、中村 明子[2]、飯村 直子[3]、吉野 純[2]、赤津 美雪[4]

[1]共立女子大学　看護学部、
[2]杏林大学　保健学部　看護学科、
[3]首都大学東京　健康福祉学部　看護学科、
[4]日本赤十字社医療センター

【目的】
病児保育が子育て支援の一端を担っているといわれているが、具体的な支援の内容に関する研究は少ないのが現状である。そこで、病児および病後児保育施設における看護職・保育職が行う保育中の子どもへのかかわりと、送迎時の親へのかかわりについて明らかにするために本研究を行った。

【方法】
質的帰納的研究法
研究参加者：首都圏・関西圏を中心とする病児あるいは病後児保育施設（6施設）に勤務する看護職・保育職（以下、保育者）15名
データ収集：保育者のかかわりを主としたインタビューガイドを用いて、施設ごとの半構成的なグループインタービューを行った
データ分析：逐語録を作成し、データ間の共通点や相違点を踏まえて質的帰納的に分析、研究者間の協議により妥当性を確保した
倫理的配慮：研究代表者所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した

【結果・考察】
保育者は、子どもと親に次のようにかかわっていた。
1. 単発や短期の利用が主で、子どものベースは「いつもの」保育園にあるので、気になることがあっても言いにくい
2. 保育中の様子を伝えたり、ねぎらったりすることで、親の方から普段の様子や気になることが話せるようにきっかけにする
3. 伝えたいことは、さりげないアドバイスの形で伝え、「指導」にならないように工夫する
4. 継続した援助が難しいので、「無責任な」かかわりはしないが、たまの利用だからこそわかることもあり、「親戚のおばちゃん的な存在」として伝える
5. 病気の子どもを預ける親にも「覚悟が必要」になるので、安心して託せる場として認知してもらえるようにする

保育者は、親との関係作りに困難を感じながらも親が安心して預けられるようなかかわりをしていた。さらに、次のように、子どもにとっても安心できる場の提供を意識して保育していた。
6. 普段の様子はよくわからないが、様々な症状を呈した幅広い年齢の子どもを看ることで、個々の子どもの特徴を把握している
7. 子どもの病状と気持ちの安定を最優先し、「その一日を楽しめる」ようにかかわり、次も「嫌がらずに来てもらえる」ようにしている

子どもの特徴を把握し、子どもが安心して楽しく過ごせるようにすることは、親の安心にも繋がっていたが、預かり中の子どもの様子を伝えることやアドバイスがその後活かされたかどうかは確認できておらず、病児保育の今後の課題である。

＊JSPS科研費26463418の助成を受けた研究の一部である

Presented by Medical*Online